論　文

沖縄の世界遺産と観光

――聖地を用いたスポーツイベントの事例から――

塩　月　亮　子・丹　野　忠　晋・渡　辺　律　子

World Heritage Sites and Tourism in Okinawa: A Case Study of a Sporting Event with Sacred Sites in Okinawa

Ryoko SHIOTSUKI, Tadanobu TANNO and Ritsuko WATANABE

要　旨：本稿では、文化人類学・経済学・健康科学という学際的な視点から、沖縄の地域再生における「スピリチュアリティ」を用いた新たな文化表象創出の動きについて、南城市の事例を基に考察を進めた。その結果、沖縄の精神文化に関心のある県内外地域の人々が、世界遺産となったセーファーウタキ（斎場御嶽）をはじめとする沖縄の聖地をスポーツイベントなどで訪れること、およびそのような動きを地元の行政側もイベントの開催などを通じて促進・強化する政策を打ち出していることが明らかとなった。さらに、このような動きは、ひいては沖縄の人自身の「沖縄（あるいは自分の住む場所）は霊威が高い」というアイデンティティ形成にも寄与していることが推察された。これらを踏まえ、今後は様々なイベントを通じてホストである地元の人々と、ゲストであるイベント参加者との交流を今以上に促進していくことが、聖地と観光の共存のためにも重要であると指摘した。

はじめに

沖縄には、「マブイ」、あるいは「マブヤー」や「マブリ」といわれる伝統的な霊魂観がある。通常、人は複数のマブイを持ち、この順調な機能によって毎日をつつがなく送ることができるという[(1)]。しかし、それを落とすと「マブイウティ（魂落ち）」の状態となり、ぼんやりとして元気が無くなり、病気や怪我をすると考えられている。そして、マブイがすべて身体から離れ、二度と戻らない場合は、死に至るとされる。子供は特にマブイを落としやすく、転んだり溺れたりといった拍子にショックでマブイが抜けると信じられてきた。身体から一時的に遊離したマブイを取り戻して再び元気になるためには、年配の女性や民間巫者であるユタなどによる、「マブイグミ」（魂込め）の儀式が必要とされる。マブイを落としたとされる場所や、そこが分からなければフール（豚小屋兼便所）、あるいはウタキ（御嶽）とよばれる原生林が生い茂る神聖な場所へ行き、マブイが戻り、生命力が満ちるようにウガン（御願）するのである。

このようなマブイをめぐる伝統的生命観は、沖縄文化を表象するものとして、小説や映画などの文芸分野においても頻繁に描かれてきた。豚がスナックに突如闖入し、驚いてマブイを落としたスナックの女性たちの魂の救済の話を描いた又吉栄喜の「豚の報い」（『豚の報い』1996　文藝春秋）や、沖縄戦で両親を亡くし、マブイを落としたままの中年男性、幸太郎に、いくらマブイを込めようとしてもうまくいかない目取真俊の「魂込め（まぶいぐみ）」（『魂込め（まぶいぐみ）』1999　朝日新聞社）などは、沖縄の霊魂観を基に描かれた小説である[(2)]。また、映画関係では、たとえば高嶺剛の「パラダイス・ビュー」（1985　製作：ヒートゥバーンプロダクション）は、本土復帰直前、主人公に思いを寄せる女性が、犬に主人公のマブイが食べられてしまう夢を見るなど、マブイが浮遊する世界を描く寓意と夢幻に満ちた作品となっている。ごく最近では、ローカル・ヒーローものに分類されるテレビ番組「琉神マブヤー」（川端匠志監督　2008～）が人気を博している。これも、マブイを落としてぼんやりしていた若い男性の主人公に、

年配の女性がマブイ込めをおこなったことにより、ウタキ（御嶽）から琉神の魂（マブヤー）が飛来して主人公に憑依し、主人公が超人的なパワーを獲得したことが前提となっており、やはり伝統的マブイ観を用いた作品といえる[(3)]。

以上の小説や映画、テレビ番組からも分かるように、これまで沖縄では、ぼんやりして元気を無くした人はマブイを落としたと解釈され、それを落とした場所やウタキ（御嶽）などの聖地に連れていかれ、そこで生命力を復活させる儀礼がおこなわれてきた。現在、その伝統的な慣習は、「スピリチュアリティ」や「パワースポット」、あるいは「癒し」の名のもとに、沖縄県外の人々にまで拡がっているとみなすことができる。というのも、沖縄を訪れる観光客のなかには、沖縄の気候や風土、文化、なかでも伝統的聖地からパワーをもらい、失った元気を取り戻す、あるいは魂の浄化をおこなうことを目的とする人も少なくないからである。見方によっては、いつの間にか「マブイ」を落として元気をなくした日本本土や海外の人々が、再び元気を取り戻せるよう、いわば「マブイグミ」のために、沖縄の聖地を訪れているということもできよう。

また、以前は沖縄の人々が癒された聖地に、県外の人々が「パワースポット」として押しかけるという現状には、日本本土側のマスコミや旅行会社などの影響のみならず、観光による地域再生を目指した地元側からの仕掛けの側面もあることも見逃せない。

そこで本稿では、現在、地元の人の手でおこなわれている、沖縄の伝統的な霊魂観や生命観を踏まえた上での「スピリチュアリティ」を核とした沖縄文化の再創造について、具体的には沖縄本島南部に位置する南城市の、伝統的聖地巡拝慣習を活用した観光事業の取り組みを例に論じていきたい。

以下の本論の構成は次の通りである。第１章は、考察対象のスポーツイベントの思想的なバックボーンである「スピリチュアリティ」について述べる。第２章は、南城市での様々なスポーツイベントの取り組みを、地域再生の観点から描写する。第３章は、本論で焦点を当てたスポーツイベントの実体験を紹介する。以上を塩月（専門：文化人類学）が担当した。第４章は、当該イベントのアンケートの分析結果を丹野（専門：経済学）が著した。渡辺（専門：健康科学）が担当した第５章は、スポーツツーリズムの一般論と沖縄以外の類似イベントを解説する。「おわりに」は、本論のまとめを塩月がおこなった。このように、本稿は、多くの要素を併せ持つイベントの分析を多角的におこなうため、学際的視点を導入したことを断わっておく。

１．スピリチュアリティとシャーマニズム

近年、特に1972年の本土復帰以降、近代化・観光化が急速に進んでいる沖縄で、自らの文化を表象するキーワードのひとつとして「スピリチュアル」、あるいは「スピリチュアリティ」、または「スピリット」という用語が目につくようになった。

「スピリチュアリティ」の定義は多様であるが、一般的には「精神性」や「霊性」と訳され、不可知・不可視な存在と神秘的なつながりを体験することにより、内面が高められ、心が成長する感覚であるといわれる。また、それは個人の経験に焦点を置いて語られやすく、制度的な宗教とは無関係なものとして扱われることが少なくないという[(4)]。

このような特徴は、民俗宗教のなかの「シャーマニズム」（民間巫者をめぐる信仰）と重なる部分が大きい。シャーマニズムは、超自然的存在との直接的な交流を通して得た神秘体験や巫病経験に焦点を置く。ニューエイジ（1970年代以降、アメリカを中心に広まった対抗文化のひとつで、東洋思想の影響を受け、人間に内在するスピリチュアルなものを重視し、意識変容による社会革命を目指そうとする文化・運動）的な用語で言いかえれば、「自己変容」や「霊性の覚醒」に焦点を置くのである。また、シャーマニズムは、固定的な教義や教団組織がなく、権威的な教祖もいない。このような非制度的な点も共通している。

確かに、シャーマニズムは文化的に規定された神や精霊により構成される世界観を重んじる一方、スピリチュアリティは特定の神を想定するよりも、個人の内面を深く見つめ、自己、あるいは文明の進化を目指すという違いがあるようにみえる。しかし、アニミズム的な特徴をもつシャーマニズムでは、神や精霊はまた、動物や草木、自然、宇宙でもあると捉えられることが多い。それらとつながることにより、自己変容と自他の救済をシャーマニズムでも目指すとすれば、ますます両者の違いは少なくなっていく。

島薗進は、グローバル化のもと、1970年代に日本でも盛んになったスピリチュアリティを重視するニューエイジ的

な運動を、「新霊性運動」とよんだ[5]。特に日本の宗教の場合、その基層にシャーマニズム的要素が見られるものも多いため、日本の新霊性運動は欧米のそれとは違い、「日本の主流の宗教や文化伝統と対立するどころか、たいへん近いところに位置している」という[6]。実際、日本では、シャーマニズムやそれをベースとして出現したさまざまな宗教とスピリチュアリティの思想が融合し、新たな宗教的様相を呈するケースが多々見られる。

このように、日本にはスピリチュアリティの思想が受け入れられやすい土壌があり、なかでも今なおシャーマニズムが盛んな沖縄では、シャーマニズムと親和性の高いスピリチュアリティが、文化再生の要として活用されているのである。

２．南城市の「スピリチュアリティ」による地域再生構想

「はじめに」でも述べたように、「スピリチュアリティ」を用いた新たな文化創出は、民間企業のみならず、南城市など行政によっても観光開発や地域再生の目玉として積極的に展開されている。ここでは、南城市が促進してきた「琉球のスピリチュアリティを求めて」[7]というテーマのツーリズム創出について見ていくことにする。

南城市は、2006年１月に旧佐敷町、知念村、玉城村、大里村の４町村が合併して誕生した。『南城市地域再生マネージャー事業　2006－2008年度活動報告書』（沖縄県南城市　まちづくり推進課編　2009、１頁）によれば、「南城市には、緑、水、海、風、太陽といった恵まれた自然環境と、琉球民族発祥神話の地、五穀栽培発祥伝説の地としての長い歴史」があり、「世界遺産に登録された斎場御嶽（せーふぁーうたき）、神々の島・久高島に代表される、沖縄の精神文化を象徴する歴史遺産」があるという。そして、このような地域資源のネットワーク化を「見る」、「癒す」、「学ぶ」をモットーにおこない、観光・保養の拠点づくりを目指そうとしているが、その際、(1) 豊かな自然や聖地と (2) 免疫力や治癒力を高める統合医療との考え方を結びつけ、南城市ならではのツーリズムを確立したいとする。これらの構想に基づき、2007年４月には「琉球のスピリチュアリティを求めて」と題した冊子やウェブサイトの作成をおこない、「拝所巡礼の東御廻り（あがいうまーい）と統合医療をキーワードにした今後の取り組みを紹介した」（同報告書　2009、２頁）。

また、「内閣府　政府の沖縄政策　南城市」のホームページ[8]には、次のような文化資源が挙げられている。

① 世界遺産斎場御嶽をはじめとした豊かな歴史文化遺産
② 観光資源を活かした充実した観光施設
③ 沖縄の空、海、緑が満喫できる観光スポット
④ おもてなしの心を大事にする温かい人情

そして、上記の文化資源を活かすことのできる次のような体験型観光プログラムが紹介されている。

体験できるプログラム（例）

・農業体験：沖縄（南城市）の農業を体験しよう。
・健康料理体験：沖縄の長寿食を実際に作ってみよう。
・歴史体験：先人たちが残した歴史に学ぼう。
・海人体験：うみんちゅ（海人）と一緒に漁業を体験しよう。
・絶景体験：沖縄の青い空と海、そして緑を自由に感じよう。（無料）

これらの体験型観光は、「がんじゅう駅・南城」と呼ばれる体験滞在交流センターをはじめ（写真１）、「緑の館・セーファ」という歴史学習体験施設や、「海の館・イノー」という海洋体験施設が拠点となっており、そこでは観光人材バンクを通じた様々な体験プログラムが提供されている。

さらに、南城市は外部にも目を向け、セーファーウタキと同じように世界遺産に認定された聖地、熊野古道との連携を図ったり、やはり現在パワースポットとして有名な宮崎県の聖地、高千穂との姉妹都市化を進めたりもしている[9]。

以上から、南城市は地域再生に景観や聖地、歴史などの伝統文化を活用し、統合医療を含む「スピリチュアリティ」

写真１　「がんじゅう駅・南城」の中の
「観光人材バンク登録者」
（2010年12月28日　塩月撮影）

写真２　「がんじゅう駅・南城」の庭にある
「パワースポット 幸せの架け橋」の看板
（2010年12月28日　塩月撮影）

の思想とそれら伝統文化を積極的に接合させることで、新たな文化創造を試みていることが分かる。セーファーウタキ（斎場御嶽）と久高島を結ぶ中間地点に「パワースポット」の看板を市が掲げたのも、このような戦略の一環と考えられる（写真２参照。ただし、2011年８月13日現在、風雨で傷んだため、この看板は撤去された）。

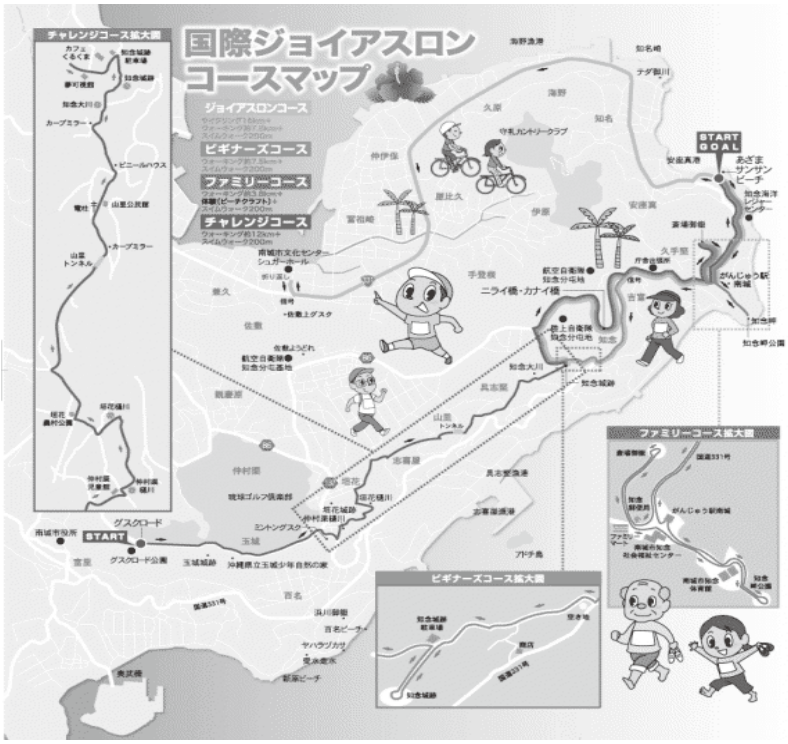
続いて、南城市がおこなってきた、聖地巡拝慣習を活用した「国際ジョイアスロン in 南城市」と、「ECO スピリットライド in 南城市」（2012年、これらのイベントは「ECO スピリットライド＆ウォーク in 南城市」に統合された）という２つの事例について見ていきたい。

３．伝統的巡拝慣習を活用した「国際ジョイアスロン in 南城市」と「ECO スピリットライド in 南城市」

沖縄には、聖地を「門中」（父系親族組織）や家族単位でめぐる伝統がある。例えば、「東御廻り」（アガリウマーイ）とよばれるものは、琉球開闢の神「アマミキヨ」の伝説に基づく聖地に、歴代の琉球国王が国の繁栄と豊穣を感謝して巡拝したことがその始まりといわれる。現在はこのような伝統行事が、行政により観光・スポーツ・歴史の学習等を目的とした新たなイベントとして活用されている。その様子を、南城市の取り組みから見ていきたい[10]。

南城市は2004年から2011年まで、「“神の島”」久高島や世界遺産となったセーファーウタキ（斎場御嶽）などの聖地を自転車や徒歩で巡る「国際ジョイアスロン in 南城市」を企画・開催してきた（地図１参照）。筆者（塩月）が参加した2005年は、「琉球王朝聖地巡拝　東御廻り2005」という名称で、１泊２日（１日のみの参加も可）にわたり実施された。パンフレットには「RYUKYU RESPECT」、「―癒しの空間―　感じよう　神々の息吹き。」とあり、参加者はまず「“癒しの体操”健美操」というオリジナル体操をしたあと、「SPIRITUAL WALKING」とプリントされたＴシャツを希望者は着て、久高島やセーファーウタキ（斎場御嶽）をはじめとする聖地を廻った。宿泊地となった久高島では、地元の伝統行事を見学し、地元の素材を用いた料理も食した。イベントの最後では、「愛の種・健康の種・平和の種」を表す五穀の入ったお守りと、「神々の印」として「風の神・火の神・水の神」のロゴが入った「完歩証」をもらった。

南城市はさらに、2011年に始まった沖縄タイムス社が主催する「ECO スピリットライド in 南城市」第１回大会（４月23～24日開催）という新たなイベントにも、共催者として係わっている（写真３参照）。これは南城市にあるホテル（ユインチホテル南城）を宿泊先とし、小・中学生から大人までを対象にしたサイクリングで廻るイベントで、「A. 世界遺産コース」（160km…勝連城や中城城跡、首里城、セーファーウタキ（斎場御嶽）、平和祈念公園などの広域を廻るコース）、「B. 首里城・平和祈念コース」（80km…首里城、セーファーウタキ、平和祈念公園などを廻る中距離コース）、「C. 歴史ガイドと巡る　東御廻りサイクリング」（28km…馬天御嶽、佐敷上グスク、テダ御川、セーファーウタキ、知念グスク、知念大川、受水・走水、浜川御嶽、ハヤラヅカサ、ミントングスク、五城城跡といった南部の聖地を廻るコース）という３種類から好きなコースを選択できるようになっている。実際は2011年３月下旬におこなわ



地図１　国際ジョイアスロン　コースマップ
（「国際ジョイアスロン in 南城市」http://www.joyathlon.net/menu/course　アクセス日：2011年２月５日より）

写真３　「ECO スピリットライド in 南城市」のスタート
（2011年４月24日　塩月撮影）

写真４　佐敷上（さしきうぃ）グスクを見学する
「ECO スピリットライド in 南城市」の参加者
（2011年４月24日　塩月撮影）

れる予定だったが、東日本大震災のため、１か月延期された。

筆者（塩月）はこのうち「C. 歴史ガイドと巡る　東御廻りサイクリング」に実際に参加し（写真４参照）、B. 80km コースの参加者も含めたアンケートによる予備調査をおこなった。C. の東御廻りコース参加者は全員で13名、アンケート回答者も13名、うち20代の男性が多く、参加理由は自転車に興味があるからという回答が９名と最多で、聖地や世界遺産に関心があるからという人は約半数（５名前後）だった。次回も参加したいという人の割合は３分の２ほどだった。

また、B. の80km コースに参加した人は169名で、A. 120km の152名より多く、そのうち55名がアンケートに回答してくれた。その結果、参加者の大部分が男性で、年齢は30～40代が最も多く、参加理由は自転車に興味があったからとした人がほぼ50％、続いて健康のためが20％強と多く、エコロジーや世界遺産に関心があるからと回答したのは、

約10％と少なかった。さらに、このような自転車イベントに既に参加したことがある人が大部分で、また参加したいという人が４分の３以上だった。以上から、参加者には自転車に興味がある人が大変多いこと、世界遺産や聖地、エコロジーへの関心はまだ薄いこと、よって地元の文化や歴史の PR は今後さらに強化する必要があることがうかがえた。

次章では、さらにアンケート結果の詳細な報告をおこなうこととする。

４．アンケート集計

本章では、予備調査で実施したアンケートの集計をまとめるとともに、そこから分かったイベントの特徴を概観する。実施したアンケート対象コースとその有効回答者数は以下の表１の通りである。今回は予備的な調査ということであり、各コースのスタートやゴールの時間の違いによりすべてを網羅することができなかったが、この予備的な調査で多くの知見が得られた。短距離の参加者と長距離の参加者ともイベントには大いに満足している。違いは、前者は聖地などの観光要素が高く、一方後者は自転車自体や自分の健康増進に興味がある。満足度の程度では、長距離コース組の方が参加費が高いとしている割合が高いものの、よりイベントには満足している。短距離の参加者は、観光に興味を持っていて満足度は高いが、一部の被験者から観光ガイドに対する要望が出ている。短距離と長距離の違いは類似の自転車イベントと同様の傾向を有していると考えられるが、様々な工夫により主たる目的をさらに伸ばし、自分たちの知らない自転車や沖縄の良さを感じ取られるようなイベントの設計が求められよう。

4.1　東御廻り

まずは比較的走行距離が短い東御廻りからアンケート結果を見る。図１に示されている参加者の性別を見ると、サンプル数が少ないのではっきりしたことは言えないが、自転車という競技の一般的な傾向からすると女性比率が少し高いと判断できるだろう。次に、年齢構成を図２でカウントすると、20代が一番多く参加している。自転車イベントは比較的お金に余裕のある30代から40代が主に参加している実態からすると、比較的若い人々が参加していることが分かる。それでも高校生が一人もいず、また50代が一人いることは、他のイベントから比べると若い人々が多いがそれでもまだ大人のイベントである特徴を有している。図３では被験者が一人で来たか、あるいは誰と来たかを問うているが、「その他」の回答が多数を占めている。一人だけサイクルリーダーという答えがあったが、このイベントを利用してグループで楽しもうという試みがある。この調査の説明が不十分だったか、あるいはそれ程親しくない職場の人間と一緒だったか、あるいは友人等と来たが自転車イベントのみは一人だったという可能性もある。次回のアン

表１　アンケート実施コースと人数

東御廻り 30km	13名
B コース 80km	55名

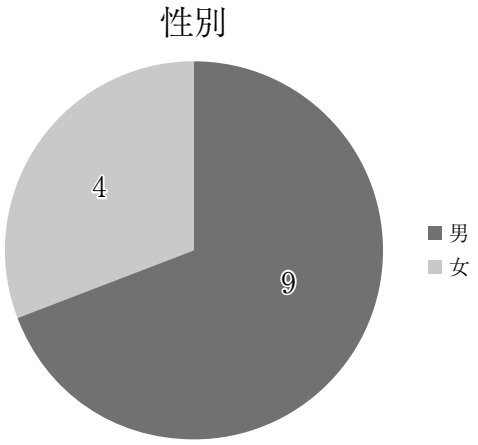


図１　東御廻りの性別

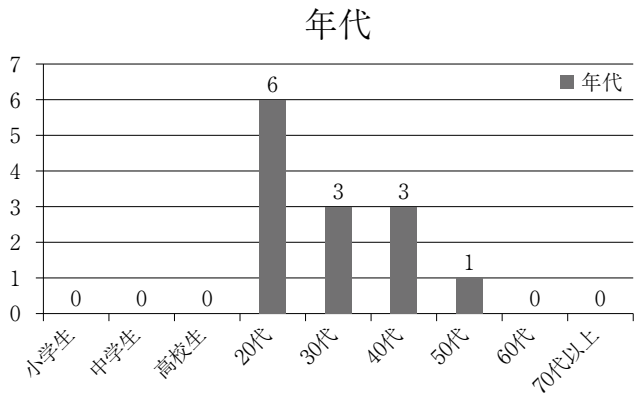


図２　東御廻りの年代構成

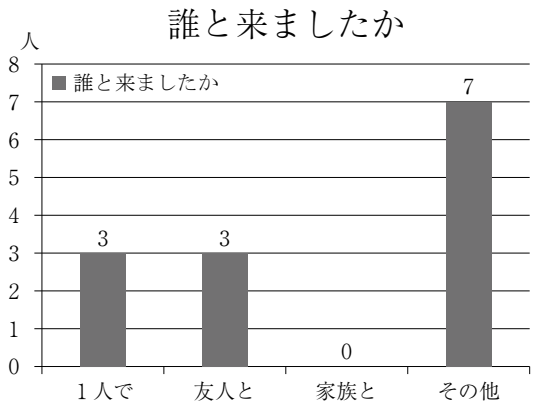


図３　東御廻りの参加形態

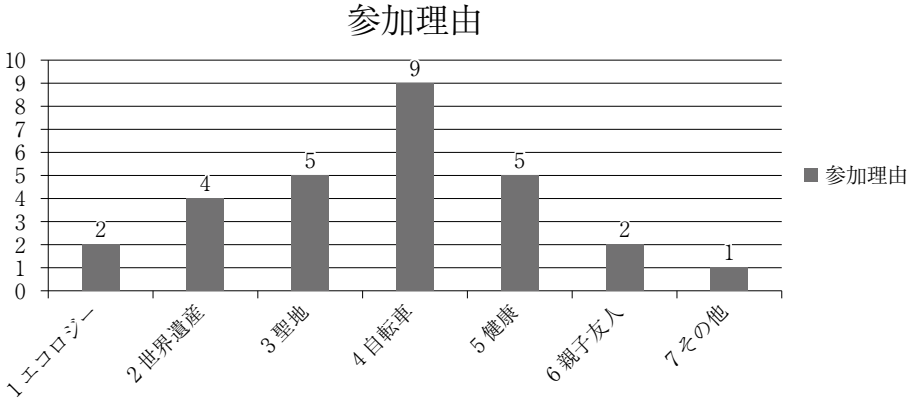


図４　東御廻りの参加理由

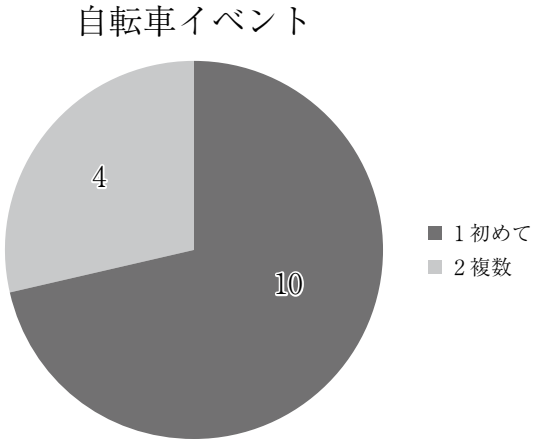


図５　東御廻りの自転車イベントの経験

ケート実施の際には、質問項目を吟味する必要がある。

次に、参加理由を３つまで回答可能とし、図４にまとめた。その結果、自転車に乗ることが一番の目的だったことが分かった。しかし、質問項目の「エコロジー」、「世界遺産」そして「聖地」と合わせると、「自転車」に匹敵している。自転車が好きではない人が参加することはないので、その中でも沖縄の自然や歴史に関心のある参加者が多かったと推測できるだろう。

次に図５より自転車イベントの経験を調べると、４分の３の参加者が初体験だったことが分かる。このことから、多くの未体験者を招き寄せることができたことが分かる。また、この距離のレベルでは、初体験者を対象に様々な取

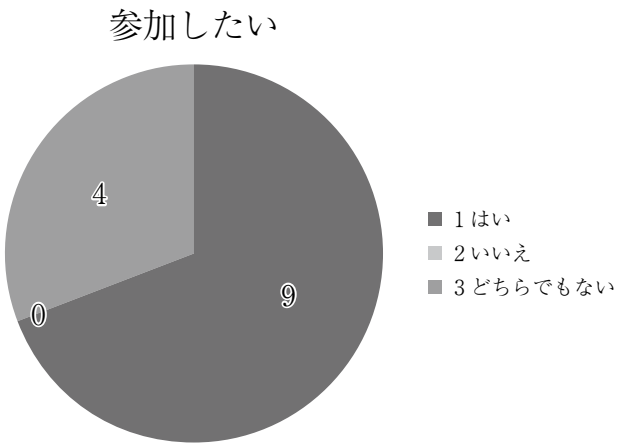


図６　東御廻りの次回の参加意欲

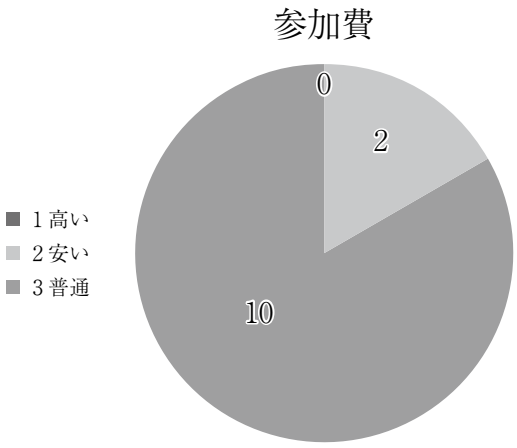


図７　東御廻りの参加費の認識

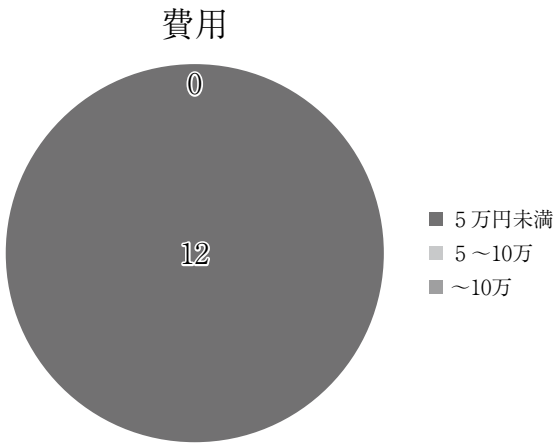


図８　東御廻りのイベント参加全体の費用

表２　東御廻り自由記述

自由記述（すべて）	
1	来年は二日間で行きたい
2	観光行動に繋がるスポーツイベント素晴らしい、他にはないスポーツしながら地域散策
3	県内の遺跡を自転車で回ることで違った感じ方。ガイドの説明がとても分かりやすい。
4	初めてのイベント参加なめていた、28km とてもつらかった。心が折れそうになった。
5	観光ガイドの話がかぶっていた。うまく連携がとれるとなお良い。
6	ガイドさんのバリエーションにもう少し工夫があればよかった
7	沖縄在住でも分からない事ばかりなので自転車イベントとからめて聖地巡りできて良い
8	史跡に立ち止まる回数が多く自転車で走った感が少ない、自転車で走る間を長くしたい
9	アップダウンが激しかった。拘束される時間が長い。
10	沖縄の歴史を間近で感じながらさわやかに汗を流せて良かった
11	コースの距離も短いし、観光しながらということもあり初心者向けで丁度良い配分でした
12	サイクリング（運動）でガイド付き（休憩）のイベントが楽しかった

り組みを設計することがイベントの成功に繋がるということが分かる。さらに、このイベントに参加したのちにまた「参加したい」かを聞いたところ、図６により４分の３の回答者が参加意欲を示している。この東御廻りコースかあるいはECOスピリットライド全体かは不明だが、過半数の人が再参加を希望しているのはこのイベント自体が成功を収めている証拠だといえるだろう。「いいえ」は全くないし、「どちらでもない」は幾つかあるが、日程調整などのどうしても外せない要因もあるからである。

費用面を見てみると、殆どの参加者がイベント内容に見合った参加費だと認識している。図７には「高い」という選択肢を選んだ人がまったくいず、「安い」と答えた人が数人いるので、このコースへの費用的な障壁はとても低いと考えて良い。アンケート結果を載せてはいないが、全員が沖縄県内から参加している。そのためこのイベントに参加する全体の費用をみると、５万円以内と全員が答えている。県外からの観光誘致よりも、県内の人々が地元の自然を低廉な負担で楽しんでいる有り様が分かる。

サンプル数が少ないので、この項目の最後に自由記述欄を表２にすべて記載する。概ね高い評価を得ている。ガイドに対する注文が散見されるが、今回は予備調査なのでどのようにガイドが観光地を説明しているのかは次回の課題としたい。また、ガイド間の連携やバリエーションについては、次回参加の時にイベント主催者に伝えて今後のイベント改善の良い情報提供をする予定である。また、コースが厳しいものと感じる参加者と距離が短いと考えた参加者が同時に含まれている。このような自分の体力とのミスマッチは当日の健康状態を含めてよくあることなので、致し方ないのではないかと考える。これは初参加者が多い事情を勘案すれば、それ程きつい人が多いという印象は受けていない。

4.2　Ｂコース 80km

次にＢコース 80kmのライドのアンケート結果提示と、東御廻り 30kmのそれとの比較をおこなう。80kmという距離は自転車イベントでは短い方であるが、自転車に慣れていない人には敷居が高く、さらに自転車にある程度の性能が求められる距離である。図９に現れているように、距離が長くなった分、男性比率が高まっている。また、最も参加者の多い年代は40代であり（図10）、これらは通常の自転車イベントの傾向と同様である。80kmはサンプル数が多くなったので、東御廻りには参加していなかった中学生や高校生も参加している。しかし、その全体に対する比率はごく小さい。図11の参加形態を参照すると、「一人で」、「友人と」、「家族と」がほぼ同数で殆ど全体を占めている。家族が夫婦かあるいは小さい子供を連れているか不明であり、さらに同じ80kmコースに他のメンバーも参加しているか分からないが、殆どが複数人で参加していることが分かる。さらにＢコースの参加理由からは、自転車に乗ることや自分の健康維持に主眼を置いている人が多い。また、家族や友人と楽しみたいという理由も比較的比重が高い。一方で、「エコロジー」、「世界遺産」、「聖地」の項目は、東御廻りと比べると随分参加理由として重要度が下がっている。この参加理由に次いで特徴があるのは、自転車イベントの経験である。図13によると、約８割の参加

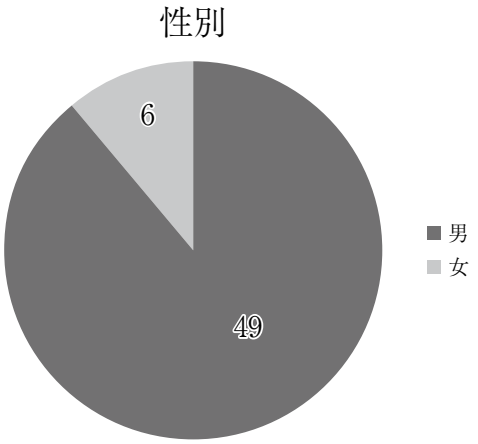


図９　Ｂコースの性別

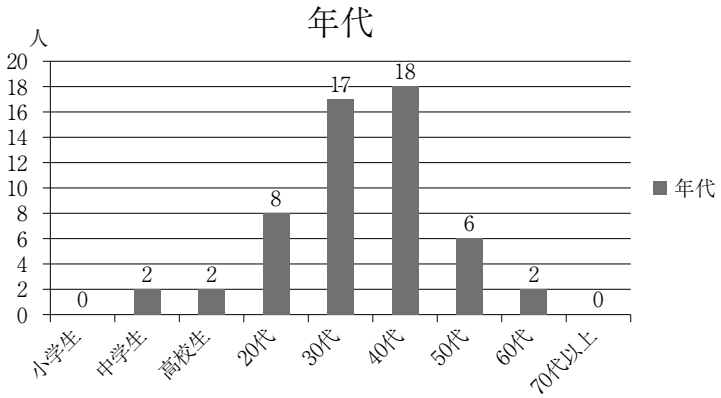


図10　Ｂコースの年代構成

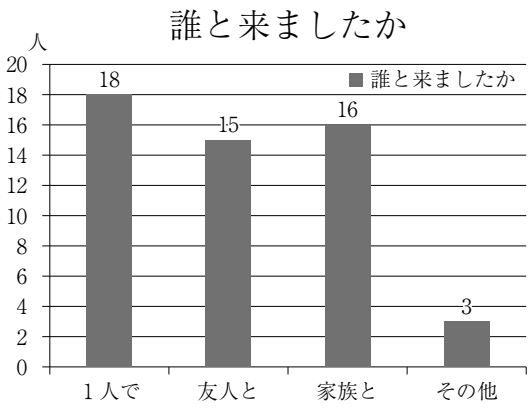


図11　Ｂコースの参加形態

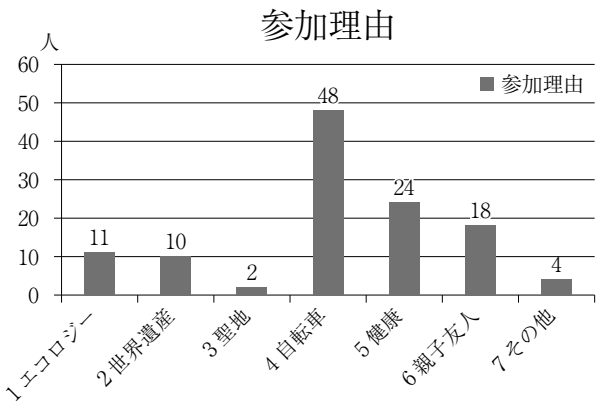


図12　Ｂコースの参加理由

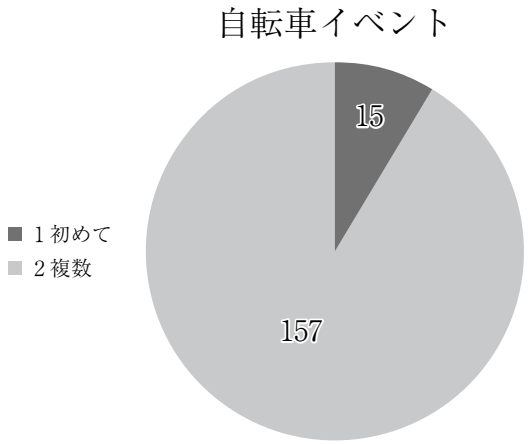


図13　Ｂコースの自転車イベントの経験

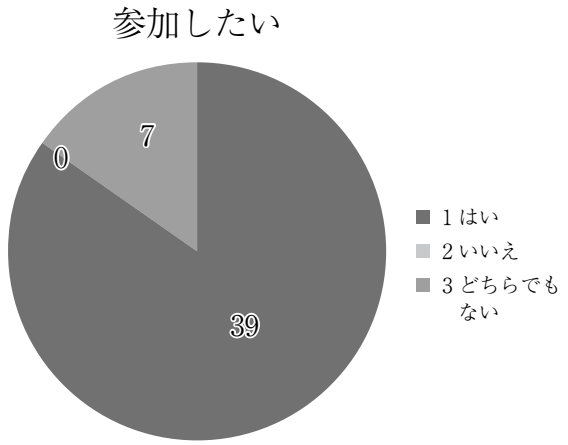


図14　Ｂコースの次回参加意欲

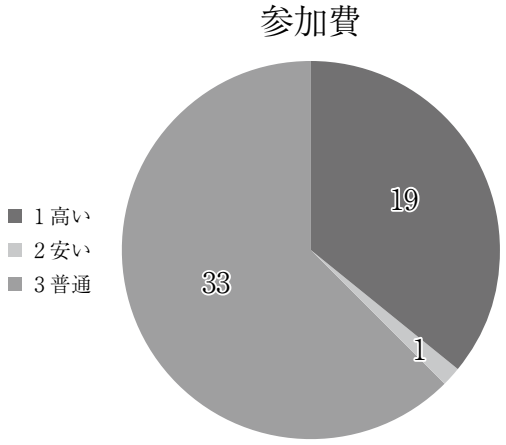


図15　Ｂコースの参加費意識

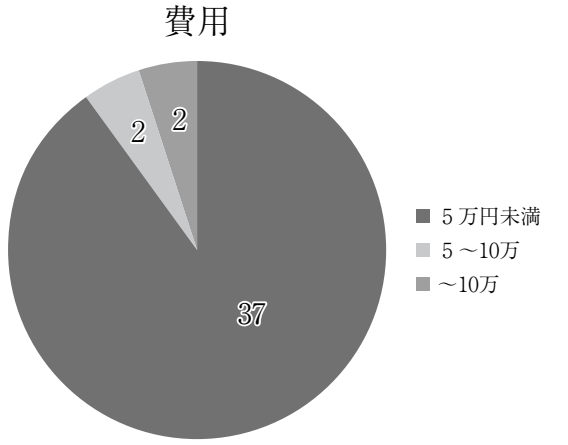


図16　Ｂコースのイベント参加全体の費用

者が既に他の自転車イベントを経験している。そのため観光目的というよりも、自転車に乗る機会を捉えた参加だということが分かる。

この結果を見ると、このライドの趣旨を理解しておらず、参加意欲が低いように思われるが、実はそうではなく、図14に示されているように次回への参加意欲は東御廻りコースよりも高いのである。観光面を期待してはいないが、コースレイアウトや運営面での良さが評価されているのであろう。自転車イベントとしては、経験豊富なライダーに

評価されているのは素晴らしいことである。負の側面としては、図15より多くの人が参加費を高いと感じている。様々な自転車イベントに参加していることは、他の参加費を払ってきたことによりある種の「相場観」を持っており、本イベントは少し割高という比較結果が出てきたのであろう。それでも大半の人は普通の参加費水準であると考えており、様々な諸経費の必要性から考えると直ちに参加費の削減などの対策は取る必要はないだろう。最後に「ECO スピリットライド in 南城市」全体の参加費用を図16により観察すると、大半が東御廻りコースと同様の５万円以下であるが、なかには10万円を超える費用を支払って参加しているライダーがいることが分かった。一部の参加者はあまり聖地の観光に興味はないようだが、それ以外のところでお金を落としている可能性が大いにある。

4.3　アンケート分析とまとめ

予備的な調査ながら様々なことが分かってきた。距離が短いコースの参加者は聖地などの観光に興味を持っているが、次回の参加意欲で測った満足度は距離の長い参加者より下である。一方で、距離の長いコースの参加者はより多くの金額をこのイベントに費やしており、参加費は高いと感じている。しかし、そのような辛口の結果にもかかわらず、自転車イベントの経験が多いのに満足度は高いと推測できる。短距離と長距離の棲み分けは前者の方がより多くの自転車以外の要素を重視しているという意味で、ファミリー向けのコースを設定している他の自転車イベントと共通した傾向があるように考えられる。

アンケートの反省点としては、予想外に県内の参加者が殆どであり、「沖縄は初めてですか」という質問は意味をなさなかった。しかし、県外から来るライダーについても、観光振興という面でもう少し考えて調査する必要があるだろう。また県内が多いという点で、費用が「５万円以下」というのは区切りが大きすぎる。次回はもっと低額のところで傾向が分かるよう工夫したい。また満足度は直接的に「とても良かった」等の５段階評価で質問した方が良いだろう。サンプル数を多くするのは難しいが、自由記述欄に多くのことを書いて貰えるよう工夫することも考慮に値する。自転車に乗っているものは筆記用具を持っていないのが普通なので、廉価な筆記用具を大量に用意してアンケートに記載して貰い、かつそれをノベルティーとして持って行って貰い、回収率を上げる方策をとってもよいだろう。また、ボランティア等のガイドの役割についても簡単な調査をおこなって、一部の不満を解消させる良いヒントになれば、さらに優れたイベントになると期待できる。

誰でも最初に走る時は初心者だが、このイベントを切掛けに自転車にさらに興味を持つにはどうしたら良いか、あるいは長距離を走る人々にも沖縄の貴重な自然の良さをどう理解させるかが、今度の課題となろう。もちろん、各ライダーの嗜好に合わせてコース設定などの基本的な部分を疎かにしてはイベント自体の魅力がなくなるが、各層が各々目的を果たし、付随的な部分で他の喜びを分かち合う工夫を少しずつおこなうべきであろう。

続いて次章では、スポーツツーリズムと地域再生構想の関係について論じる。

５．スポーツツーリズムと地域再生構想

2007年に施行された「観光立国基本推進法」に基づき観光立国実現に向けた目標が掲げられ、2010年１月の「観光連携コンソーシアム」で新しいニューツーリズムとして「スポーツ観光」が取り上げられた。それを受けて同年５月に「スポーツツーリズム推進連絡会議」は「スポーツツーリズム推進基本方針」を2011年６月にまとめた。その要旨[11]は

> スポーツツーリズムとは…スポーツを通じて新しい旅行の魅力を創り出し…我が国の多種多様な地域観光資源を顕在化させ…。スポーツ振興はもちろん、健康増進、産業振興など幅広い効果を期待…。スポーツと観光の垣根を超えて地方公共団体内、各種団体間で連携…」となっている。

まず「観光資源」とは何かについて考えてみる。岡本（2010）[12][13]は、

> その地域にある歴史的な建造物、自然景観だけでなく、その土地独自の伝統や文化といったものが「資源」として

活用されるべきものであり、「資源化」される対象は、人間の欲望、集団の目標によって意識化され「発掘される」のである。…つまり「豊かな生活を維持･向上させるために足る域外者の招致」であり、そこで地域独自の「歴史・伝統・文化」や「自然景観」に求められるのは「域外者を引きつける」機能・効果であり、地域の社会・経済的活性化を促す機能なのである、と述べている。

南城市は先に述べたように、伝統的巡礼習慣を活用した「国際ジョイアスロン in 南城市」、「ECO スピリットライド in 南城市」を主催（共催）することで、伝統文化と「スピリチュアリティ」思想を接合させて新たな文化創造を試み、同時に地域再生構想を試みようとしている。「国際ジョイアスロン in 南城市」、「ECO スピリットライド in 南城市」はともにウォーキング、自転車等のスポーツを取り入れたイベントであり、他県からのツーリストを呼び込むことで地域の活性化につながると推測される。

次に、これらのイベントをスポーツツーリズムの観点から新たな観光資源とするにはどうしたら良いかを、類似のスポーツイベントを取り上げて比較検討をする。類似のスポーツイベントとして以下の２つの団体のイベントを取り上げる。

１）「バイコロジーをすすめる会」[注]（自転車関係団体を中心とする21公益団体から組織されている団体）のイベント

・「バイコロジー・シンポジウム2011 in 紀の川　海も川も山も、世界文化遺産も、ぜ～んぶ自転車で楽しんで」[14]（2011　10/15、16）

（概要）２日目のサイクリング参加者約300名　目的：サイクリングを通じて、紀の川の自然環境や世界遺産などの文化財を含む地域資源の保持、サイクリングロードの整備、地域間の交流・連携・健康作り促進：１日目シンポジウム、２日目サイクリング、２日目はサイクルトレイン（自転車をスタート地点まで運べる列車）を運行。各種自転車試乗会、抽選会。コースは３会場４コースが設定されており、会場毎にスタート、ゴール地点が異なる。このイベントは多様なコースを作り、サイクリングをおこなうこと自体に重点を置いたイベントといえる。１日目のシンポジウムでは、会場である近畿大学の教員による「自転車健康法」についての講演があり、自転車愛好家や一般市民にも参考になる内容であった。また有名なサイクルナビゲータや地元出身の冒険家を招いてのパネルディスカッション「自転車で紀の川流域の魅力再発見」）は、翌日のサイクリング参加者、特に県外者にとっては参考になるテーマであった。

２）アースライド（EARTH Ride）プロジェクト[15]によるイベント

「アースライド」とは自然、歴史、文化を感じながら楽しめるロングライドイベントのことで、自転車を通じて仲間や地元の人々との交流を深め、共に環境の大切さを考え、自然・音楽・文化を楽しむことを目的としたサイクリングイベント。タイムや勝敗を競うのではなく、初心者や女性でも無理のない制限タイムで回れるように40～160kmのコースが設定されている。環境（エコ）に重点を置いた自転車スポーツイベントを企画している。

・「京都アースライド2011」（5/28、29）

参加者780名。自転車を楽しみながら CO_2 を抑制して（抑制量を計測）、京都の歴史・文化・世界遺産を巡るイベント。参加者は自転車で思い思いの場所からスタートし、自由にコースが設定でき、下鴨神社（世界文化遺産、縁結びパワースポット）等、幾つかチェックポイントを通過して各自ゴール（京都市役所前広場）を目指す。「エコロジー」にポイントを置いたサイクリングイベント。CO_2 抑制量を計測する企画は企業とのコラボレーションである。コース設定は自転車によるオリエンテーリング的楽しみもあり、参加者個人の興味ある場所を巡ることも出来るレクレーション的要素も取り入れている。注目すべき点は、CO_2 抑制量計測による自然環境・エコへの啓蒙と、参加者のニーズに合ったコース設定ができる点である。

注）バイコロジー：自転車を「安全かつ快適に利用できる環境作りを進めることで、自然豊かで、人間味のある社会構築を図る」[14]

・石垣アースライド2011 （11/19、20）

参加者80名（「石垣アースライド2010」参加者は50名） 島特有景観、アップダウンのある美しい海岸線を走るコースが設定されている。２日目は西表島へのオプショナルツアー（60名参加）、ウミガメツアー（20名参加）等も用意されている。離島ということもありツアーエントリーをすれば航空券、宿泊・参加料、自転車運送がセットになっており、参加者にとっては参加手続きが簡便であり、同時に関連企業や地域経済活性化にもつながる。まさにスポーツツーリズムによる地域再生観光振興策といえる。

最後に、スポーツツーリズムの観点から先に挙げた２つの団体のイベントを参考に、南城市における「ECO スピリットライド in 南城市」のイベント内容について検討をおこなった。

まず「イベントの内容」について、南城市は地域再生資源として「聖地」や「世界遺産」をあげているが[16]、ツーリズムの観点から言えば「島」であること自体重要な観光資源である。２）の「石垣アースライド2011」は離島での開催であるため、ツアーエントリーをすれば航空券、宿泊・参加料、自転車運送の手続きがセットになっており、参加者にとっては手続きが大変便利である。予備調査アンケートによると「ECO スピリットライド in 南城市」の参加者の多くが沖縄県内の参加者であったが、県外から参加する場合は航空券、宿泊、自転車運送の手続きをとる必要がある。募集要項をみる限りではこのような手続きの代行は見られない。スポーツツーリズムの観点から言えば自転車運送を含めた航空券、宿泊・参加料のツアー代行を提言したい。次に沖縄は離島であり、観光資源が豊富なので県外者を招致するために、オプショナルツアーを企画するもの良いと考える。

「石垣アースライド2011」は2008年から開催され、参加者は増加傾向である。「ECO スピリットライド in 南城市」イベントにおいても参加者がリピータとして、また知人友人を誘って再度イベントに参加したいと思えるような企画が欲しい。スポーツイベント参加者の多くはイベントに交流の場を期待する。

次に「ECO スピリットライド in 南城市」の参加者は、アンケートによると「世界遺産」「聖地」に対する関心が低かったが、これはホームページや募集要項での「世界遺産」「聖地」についてのアピールが伝わりにくいからなのではないかと筆者（渡辺）は感じた。募集要項を見ると注意事項欄に突然「…ウタキの植物・石を持ち帰らないで下さい」と書かれており、県外者にはその意味がよく分からないのではないか。「バイコロジーをすすめる会」の「自転車で紀の川流域の魅力再発見」のようなシンポジウムを参考にして、例えば前日に「世界遺産」「聖地」についてのレクチャー企画をおこなえば、そこで聖地に対する興味・関心も高まり、注意事項にあった「…ウタキの植物・石を持ち帰らないで下さい」の意味も理解できると考える。

まとめると、域外者つまり県外のツーリストをリピータを含めていかに多く招致できるかが、地域経済の活性化を含めた地域再生構想につながる。単なる観光目的ツーリストであれば「世界遺産」は一度見ればよしであるが、スポーツツーリズムの観点からは参加者がリピータとして、また知人友人を誘って再度イベントに参加したいと思えるような企画が欲しい。スポーツイベント参加者の多くはイベントに交流の場も期待するので、南城市の「ECO スピリットライド in 南城市」においても、聖地を含めたコースが良いから又走りたい、地域の方との交流が楽しみだから毎年参加したい、という魅力あるイベント内容とコースを再度検討する余地があると考える。その手段として他の類似スポーツイベントを参考に追求するとよいと考える。

おわりに

本稿では、沖縄の地域再生における「スピリチュアリティ」を用いた新たな文化表象創出の動きについて、南城市の事例を基に考察を進めてきた。その結果、沖縄の精神文化に関心のある県内外地域の人々が、世界遺産となったセーファーウタキ（斎場御嶽）をはじめとする沖縄の聖地をスポーツイベントなどで訪れること、およびそのような動きを地元の行政側もイベント開催などを通じて促進・強化する政策を打ち出していることが明らかとなった。ただし、サイクリングがメインのイベント（そのうち、特に長距離のコース）では、聖地巡りよりも自転車に乗ることそのものに興味がある人が多く集まることも分かった。今後は、他のサイクリングイベントと差別化するためにも、沖縄らしい魅力ある観光資源のアピールを、今以上におこなっていくことが欠かせないだろう。

なかでも、沖縄の聖地は、観光資源として大変有力なものといえる。沖縄の聖地には、洞窟や海が見渡せる山頂、原生林など、太古の自然や神、悠久の歴史を感じさせる場所が多い。従って、その文化外の者にとっても、そこは異界であると同時に、自分と地続きの懐かしい、始原を感じさせる場所となる。そのような場所を自転車や徒歩で巡ることは、単なる健康促進以上のもの、具体的には沖縄の歴史や文化、自然、信仰等を学ぶと同時に、自らを見つめなおす良い契機となるだろう。イベントの趣旨などからもうかがえるように、主催者側も経済効果や健康促進効果はもちろん、沖縄の自然や琉球王朝の歴史や文化を学び、あるいは聖地を巡り「スピリチュアリティ」に触れることをイベント参加者に期待しているといえる。

沖縄は、マブイ信仰をはじめとする伝統文化の保持と、近代に始まる観光化とのはざまで揺れている。だが、本稿では、聖地と観光が共存できる可能性もあることを、様々なイベントを通じての地元の人々との交流という側面から提案したい。「国際ジョイアスロン in 南城市」や「ECO スピリットライド in 南城市」では、参加者はガイドの方とはもちろん、その他の地元の方々とも、芸能の披露や歓迎会などを通じて交流ができるようになっていた。ただし、2011年開催の「ECO スピリットライド in 南城市」では、イベント終了後に催された交流会への参加者がそれほど多くなかったように見受けられた。おそらくその理由のひとつには、我々のアンケート調査でも明らかとなったように、自転車に乗ることをイベント参加の主たる目的にしている人々（その多くは長距離コースの参加者）が、競技が終わったのでそれ以外のことには興味を持たずにすぐ帰ってしまったことが挙げられるだろう。今後は、そのような参加者にも沖縄の文化・歴史等に興味を持ってもらうにはどうしたらよいのか、さらなる工夫が必要となろう。

本稿で扱った事例のように、いま沖縄では、伝統行事を基に遺跡や聖地を巡ることで歴史や文化を学び、スピリチュアリティを高め、同時に健康を促進し、観光を楽しむ（あるいは地域経済を活性化する）ことを意図した新たな行事が創出されている。このような動きは、ひいては沖縄の人自身の「沖縄（あるいは自分の住む場所）は霊威が高い」というアイデンティティ形成にも寄与しているといえる。なぜなら、このような大会が開催される前は、必ずと言ってよいほど安全と成功を祈願して聖地を廻ることが大会主催者（沖縄の人々）によりおこなわれており、聖地巡拝型イベントの実施が、沖縄の神や信仰に関して地元の人々が再認識するよい機会ともなっているからである。それは、聖地を用いた経済活性化という意味合い以上に、神観念そのものの活性化を第一に目指しているようにもみえる。実際、そのように開催目的を説明する主催者の人もいる。また、どの聖地をコースとしてピックアップするかに関して、聖地の霊威の高さや優越性など霊的観点から意見を言うイベント関係者もいる[17]。そこには、単なるレクリエーションとしてのイベント以上の意味づけがなされていると考えられるのである。

今回は、主にイベント参加者へのアンケート分析、および他のスポーツイベントとの比較考察を通して、イベント活性化のための提案をいくつかおこなった。これからの課題としては、イベント参加者というゲストのみならず、主催者をはじめホストとなる地元の人々の意識調査をより詳しく実施することが挙げられる。それに加え、ホストとゲストの交流の場における綿密な調査も実施し、ホストにもゲストにも利するイベントや観光とはどのようなものかということを、十分に検討していかなければならないだろう。

謝辞

本稿作成にあたり、南城市長の古謝景春氏、ならびに南城市役所総務企画部観光・文化振興課の宮城寛志氏、南城市観光協会の宮城重徳氏、スポーツツーリズム沖縄の喜久里忍氏には、多大なご助力・ご教示をいただきました。また、沖縄タイムス社広告局の外間敏氏、具志堅毅氏、稲嶺伸作氏には、アンケートを含む調査の許可とご協力をいただきました。その他、各イベント大会事務局の皆様、アンケートに答えてくださった参加者の皆様など、沢山の方々にお世話になりました。執筆者一同、ここに、心より感謝申し上げます。

注

⑴　加藤正春　2008「マブイ」渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也編『沖縄民俗辞典』pp.475-476　吉川弘文館、赤嶺政信　2008「マブイグミ」前掲書　p.476　参照。

⑵　他にも、池上栄一の『風車祭（かじまやー）』（2001　文藝春秋）や『あたしのマブイ見ませんでしたか』（2002　角川書店）など、マブイを題材にした文学作品は数多くある。

⑶「琉神マブヤー」に関しては、沖縄サブカルチャーの結晶としてみなすことができるという、加藤宏の興味深い論考がある（加藤宏　2011「『琉神マブヤー』を読む―「沖縄」を救う・遊ぶ・肯定するヒーロー―」『戦後沖縄文学と沖縄表象』沖縄文学研究会（科研費報

告書）pp.105-115）

⑷　樫尾直樹　2005「スピリチュアリティ」井上順孝編『現代宗教事典』pp.295-296　弘文堂

⑸　島薗進　1999『精神世界のゆくえ―現代世界と新霊性運動―』東京堂出版

⑹　前掲書　p.62

⑺　ホームページ「沖縄県南城市　琉球のスピリチュアリティを求めて」
http://www.city.nanjo.okinawa.jp/agarimawari/revival/index.html（アクセス日：2011年２月５日）

⑻「内閣府　政府の沖縄政策　南城市」ホームページ
http://www8.cao.go.jp/okinawa/4/414_02nan.html（アクセス日：2011年２月５日）

⑼　南城市は、2008年「熊野で健康プログラム」を調査し、当時企画中だった「健康ウォーキング in 南城」と比較したりしている。このような熊野との連携の動きに関しては、『南城市地域再生マネージャー事業　2006－2008年度活動報告書』（沖縄県南城市　まちづくり推進課編　2009　p.25、pp.91-104）に詳しい。また、2010年12月24日に筆者（塩月）が実施した南城市総務企画部　観光・文化振興課主幹兼係長Ｍ・Ｔ氏へのインタビューにおいても、熊野および高千穂との提携に関する話を教えていただいた。

⑽　詳しくは、塩月　2006「沖縄のスピリチュアリティ―シャーマニズム・インターネット・ローカリティをめぐって」『アジア遊学』第84号　pp.27-32　勉誠出版　参照。

⑾　観光庁ホームページ「スポーツ観光」
http://www.mlit.go.jp/kankocho/topics01_000112.html/（アクセス日：2012年１月６日）
・資料２「スポーツツーリズム推進基本方針（概要）～スポーツで旅を楽しむ国・ニッポン～」
・資料３「スポーツツーリズムの推進について」
スポーツ・ツーリズム推進連絡会議　2011. 6

⑿　岡本純也　2010「『観光資源』としてのスポーツ」一橋大学スポーツ研究　p.34.

⒀　岡本純也　2011「地域活性化対策としてのスポーツ・ツーリズムの可能性」一橋大学スポーツ研究　pp.61-65.

⒁　バイコロジー　ホームページ　http://www.bikecology.bpaj.or.jp/guide/（アクセス日：2012年１月６日）

⒂　アースライドホームページ　http://www.earth-ride.jp/index.php（アクセス日：2012年１月６日）

⒃　エコスピリットホームページ　http://ecospiritrid.jp/index.html（アクセス日：2011年７月30日）

⒄　筆者（塩月）は実際に、今回の東御廻りのコースに南城市の百名にある藪薩御嶽（ヤブサチウタキ）が入っていないことに苦言を呈しているイベント関係者の話を聞いた（2011年４月22日　Ｋ・Ｓ氏へのインタビュー）。